

## 歌語、雅語について

桑原 正紀

かつて短歌が和歌と呼ばれていたころ、その修養の第一歩は、和歌特有の言葉や修辭を身につけることだった。それは平安時代から明治の中頃まで千年近く変わらなず続いたルーティンであり、〈和歌の師〉というのは欠かせない存在だった。いまやそうした定まったルートのようなものがあるわけではなく、誰でもすぐに、指折り数えながらでも短歌を作ることができる。

ただ、この歌語や雅語さらにその周辺のいわゆる和歌的表現には、歌詠みを惹きつける不思議な力があって、現代の短歌の中でもしつかりと命脈を保っている。「夫」<sup>つま</sup>、「蛙」<sup>かわず</sup>、「東雲」<sup>あづのめ</sup>、「月読」<sup>つきよみ</sup>、「夕星」<sup>ゆゆうすつ</sup>、「睦月」<sup>むつき</sup>、「如月」<sup>ききつひ</sup>、「弥生」<sup>やよい</sup>…、こうした類の語が時を超えて愛用されているのだ。これらを使うと、なんだか歌が雅やかで上等になったような気がしてしまうのだが、そこには落とし穴もある。どうしても古色がつきまとうからだ。現代短歌では歌語、雅語をいかに生かして使うかということが課題となっている。

きさらぎの風通りつつ梅の花咲き満たんとする多摩の  
横山 宮柵二『忘瓦亭の歌』

きさらぎの銀河のそらに吹きおこる風はたはたとわが  
夢に入る 高野公彦『汽水の光』

両者ともいい歌である。柵二の歌が古格にのつとり堂々とした風格のある歌になっているのに対し、公彦の歌は古語をいかに新しく使うかという点において、明らかに自覚的な処理の仕方をしている。これはどちらがいいということではない。

歌語、雅語に代表される古語が現代に生き残っている意味を考へることは、短歌を表現手段として選択した者にとつてたいへん重要なことと考へる。一般の人にはもう縁遠くなつてしまった古語をいつくしみ、たいせつにし、普遍的な価値を見出していく道を探ることこそ歌詠みの使命と思ふのだ。上田三四二氏が「日本語の底荷」と表現したように、短歌を表現手段とするということは、変遷してやまない流れの最後尾にあつて、忘れてはならないもの、捨ててはならないものを回収していく地味な立ち位置を容認することだと私は思っている。

最後尾を行きながらも、短歌もやはり新しくなつていくだろう。しかし、長い尾をすっぱり切り離れた短歌はおそらく短命だ。スタンスこそ違え、古きものへの理解といつくしみは、短歌の要件であることは間違いない。